海の海から

白浜で出会った生きものたち ㉖

京都大学助教授　久保田　信（京都大学瀬戸臨海実験所）

モンガラカワハギ類の凍死

希少種クマドリ29年ぶり漂着

田辺湾で潜水調査や寒波による大量死亡調査、近隣漁港での漁獲物調査でも、1975年以降発見されていなかったモンガラカワハギ科に属する希少種クマドリが1月30日、北浜に打ち上がった。体長4㌢あまりの若魚だった。

クマドリはその名が示すように歌舞伎役者がする化粧のような模様が特徴だ。今回見つけた幼魚も成魚と同様に、暗褐色の地色に体を斜めに走る多数の黄褐色の帯があり、尾の付け根には1個の大きな黒い斑点（はんてん）があったのですぐ分かった。

クマドリが田辺湾で生息確認されたのは、本州での初記録として60年代に1個体、75年に1個体だけで、以降はまったく記録がなかった。その理由は、第23回で紹介したクロハコフグと同様に、本場の南西諸島から黒潮に乗って運ばれてくる幼魚の個体数がとても少ないということだ。

今回の貴重な記録は、田辺湾周辺海域の魚類相を調査している田名瀬英明さんとの共同研究として、南紀生物同好会の会誌「南紀生物」第46巻1号に掲載の予定である。

モンガラカワハギ類といえば、熱帯の海を飾る派手で美しい模様の紋柄をつけ、左右にへん平で、ハギ類に似ている。インド・西太平洋には約20種ほどが生息している。

この仲間のクマドリは現地では体長25㌢に達するが、本州沿岸で記録のある和歌山県や高知県、そして伊豆諸島の八丈島でもみなそろって小さなものばかりがごく少数個体確認されているだけである。伊豆諸島を除くと和歌山県は分布の北限ともなっている。

ハコフグ類と同様、モンガラカワハギ類は泳ぎがうまくないのだが、事故死して打ち上がらないのには、はっきりとした理由がある。彼らには、ひれに丈夫な刺（とげ）があって、岩穴に潜り込んだら簡単には引きずりだせないほど強力なひっかかりになるからである。しかも、うろこがやすりのようにざらざらしていて、体全体の摩擦の力も大きい。

1月中旬から2月中旬は海水温の低下が連日継続したので熱帯系魚類の凍死が起こった（第23回）。クロハコフグやツノダシが凍死したのだったが、モンガラカワハギ類のツマジロモンガラの幼魚も多数打ち上がった。この幼魚の体色は、背側が黒く腹側が白いといった独特の模様で、全体が黒ずんだ親の体色とはずいぶん異なっている。親とは別種のように見えるので、種を決定する時には要注意だ。

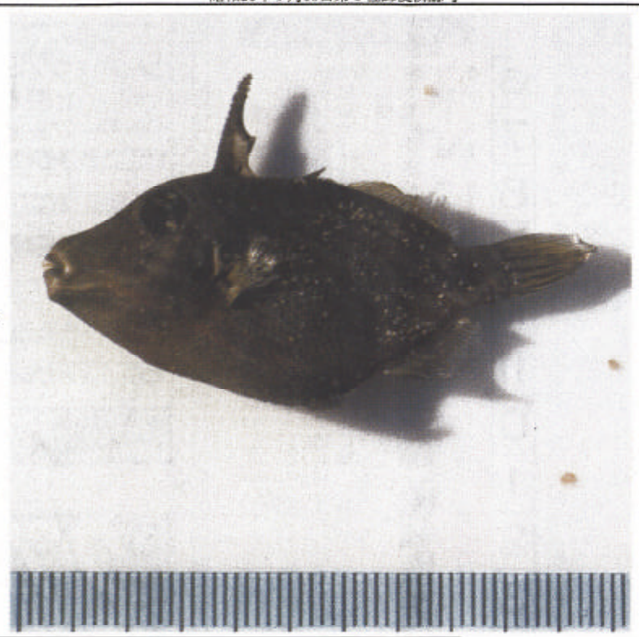
瀬戸臨海実験所水族館ではモンガラカワハギの仲間2種が飼育展示されている。いずれも沖合に生息する種である。名前がハギとはなっているのだが、オキハギはモンガラカワハギの仲間としては数少ない遊泳型である。ひれもそのためかこの仲間では特大である。

アミモンガラは、幼魚時代に流れ藻などの浮遊物に寄り添って沖合の表層を漂っている。白黒模様は網のようになっており、派手な仲間としては異例のしぶい色調である。

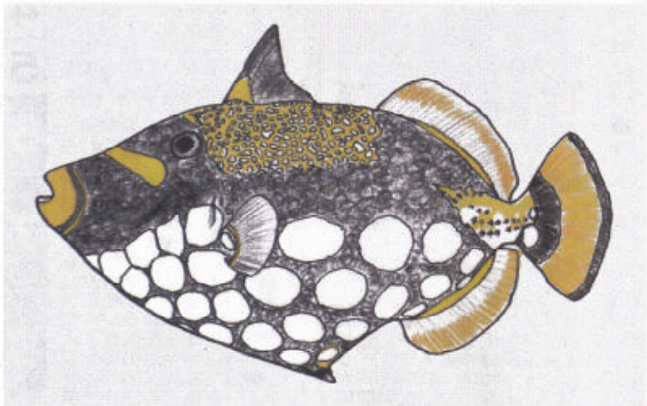
2種とも、北浜付近に漂着した個体はまだ見たことはないのだが、風や潮流によっては本来の生息域から離れた内湾で見つかることもあるだろう。

北浜でのシュノーケリング観察では、夏場にモンガラカワハギ類のムラサメモンガラや、タスキモンガラの幼魚が、遊泳しているのを目撃したことがある。いずれも、なんともかわいらしい子どもの親指ほどの大きさであったが、2種ともその目立った美しい独特の紋柄ですぐに種類は分かった。ムラサメモンガラは英名で、ピカソ魚とよばれるほど、けばけばしい色調の紋柄である。しかし、彼らも、冬には人知れず凍死しているのである。

同水族館には白浜近郊ではぜったいに大きくなれない魚が大事に飼育展示されている。体長数十㌢を超え、沖縄にいるサイズまで成長したモンガラカワハギは、天寿をまっとうして最近死亡したが、北浜にも1度だけ、これほどではないが、大形個体の打ち上げがあった。

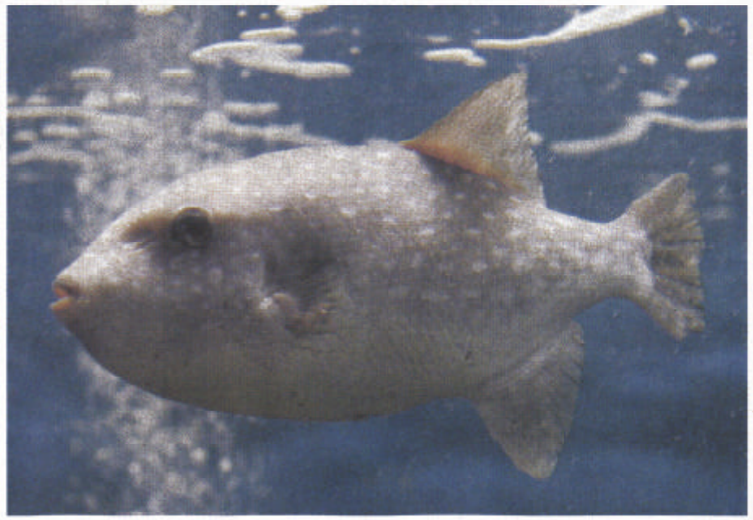


北浜へ打ち上がった珍しいクマドリ（幼魚）



△　モンガラカワハギの成魚（日本産魚類図鑑、1985を改変）

△
北浜へ打ち上がった熱帯系魚類のツマジロモンガラ（幼魚）



△
網目模様のアミハギは幼魚時代は流れ藻について漂流している
（京都大学水族館で）